

現代ロシア幻想小説

川端香男里編

現代ロニア幻想小説

定価九〇〇円

一九七一年九月一五日 印刷
一九七一年九月二八日 発行

編者 © 川端香里

訳者 © 佐々木彰
灰谷慶三
川端香里

発行所 株式会社白水社
印刷者 山田博
発行者 寺村五一
工藤正広

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(五七)七八二一(代)
振替東京三三三二二八
郵便番号一〇一

三陽社印刷・黒岩製本

(分) 0097 (製) 70330 (出) 6911

現代ロシア幻想小説

現代ロシア幻想小説

川端香男里 編

佐々木 彰

灰谷 慶三

川端香男里

小平 武

工藤正広 訳

白水社

目次

牧神（ファヌス）（アレクセイ・トルストイ）	7
赤い唇の客（フォードル・ソログープ）	16
ルーシの地、滅亡の物語（アレクセイ・レーミソフ）	31
洞窟（エウゲーニー・ザミャーチン）	40
最後の審判（ミハイル・プリシヴィン）	53
水彩画（アレクサンドル・グリーン）	59
トゥーラからの手紙（ボリース・パステルナーク）	66
明日（ニコライ・アセーエフ）	77

あるロシア的情景（ウラジーミル・ブコーフスキー）	89
遠い蟻たちの叫び（アレクサンドル・ウルソフ）	95
天の川の下で（ニコライ・エレーネフ）	104
ディヤボリヤード（悪魔物語）（ミハイル・ブルガーコフ）	114
回帰（アンドレイ・ペーリイ）	161
エジプトのスタンプ（オシノプ・マンデリシュタム）	235
ロシア幻想文学の系譜（川端香男里）	275

牧 神 (フアヌス)

アレクセイ・トルストイ

秋日和の続いているさなかに、不意に、霧が乳色の壁となつて湾内からベテルブルグの方へとせり出してきた。海鳥どもが市街に現われた。イサーキイ寺院の上を、ホーホーと声を長く引く張つて鳴きながら、白鳥の群れが通りすぎた。黄色いスモッグが屋根を越えて街路沿いに這い出し、全市をおおい隠してしまつた。

真昼に電燈がつけられると、それらは燐光を発する卵のように光りはじめた。交差点からは家並みが見えず、道行く人は霧に取り囲まれて、砂漠のなかを歩いて行くみたいに足もとがおぼつかなかった。何も見えないなかから蹄の音が響き、姿の見えない市内電車が、たえず警笛を鳴らしながら、のろのろと用心深く這つて行つた。

空想家どもにとつてまかふしきな時であつた。まるで全市が陥没してしまい、人と人との間に異物がまぎれこんだかのである。

一八番街をひとりの娘が急ぎ足で歩いていた。マルーシャ・モリーナという名前だつた。ピロードのスマートな服を着て、赤いリボンのついた帽子を片方の目の上に引きよせて目深にかぶり、ふかふかしたマフを股にそつてふりながら、楽しいことをいろいろと考えていた。楽しいことというのは、明日ネフスキー通りの写真屋のショー・ウインドーに彼女の肖像写真がかざり出されること、それから昨日ふたりの近衛将校が、うしろの方から大声でおせじを言つて、かわい子ちゃんと呼んだこと、その他、これまで経験したことのない多くのことであつて、新聞に彼女が美人だと書かれたことなども、その一つであるに違いない。自分の肩によつて引き裂かれる霧の塊のことだの、黄色っぽい透明な光のことなどは、彼女は少しも考えていなかった。街角まで駆けていって、彼女は立ちどまつた、——なに一つ見えない、

ただもう一面に、石の上を這ってゆく霧だけである。スカートを持ち上げて、彼女はもう小さな片足を歩道から下におろしたが、すぐさまひっこめた、——前方の霧のなかに、うつむいている人影がぼんやりと見えたからである。

これがふたりのそもその出会いだった。マーシャはこのできごとに眉をひそめ、マフであごを隠すと、速足で通りすぎた。少したって彼女は背後に、鼻息と、追いかけてくる足音を聞いて、「しまった、あとをつけている！」と思った。歩道の広い所へ出たとき、追跡者は走って追い越し、くると向きを変えた。そして急いだため、はあはあいいながら、眉をあげ、青い陽気な目を大きく見開き、大きな口をあけて、立ちどまった。その頭はなんとも奇異なものであった。がっちりして、額が出っぱり（シルクハットが脳天の上におっ立っていた）、ほおはバラ色で、校箒（えだぼろ）のようなあごひげをはやし、ちぢれた赤毛だった。からだはずんぐりして、背が低く、チェノクの外套としゃれこんでいた。

マーシャは少しおじけづいて、顔をしかめた。この見知らぬ男の顔には、鏡のように、彼女の感情が映ったが、

しかし裏返しにある。彼女がいっそう強く眉をひそめると、彼はその分だけ余計に大口をあいて薄笑いを浮かべるのだった。まるで太陽が霧をつんざき、その高みから細い光線で彼の顔の上に微笑や嘲笑をちらつかせるかのようであった。マーシャが右へ動くと相手も右へ動き、左へ動くと相手も両手を無器用にひろげて左へとんだ。そこで彼女は悲鳴をあげて、向きを変え、もときた道を駆けだした。歩道沿いに辻待ちの馬車が一台通っていた。マーシャはそれにとび乗ると、マフでたたいて馬車を駆り立て、ぞくぞくしながら後をふり向いた。上からも、両脇からも、いたるところから霧が飛んでくる。だれもあとを追ってくる者はない……マーシャは笑顔になって馭者に行先を言った。彼女はデートの時間にもう一時間以上も遅れていた……そして、男がいらいらしながら長いあいだ彼女を待っていることを思うと、いまいましそくに下唇をつき出して、肩をすばめた。彼女のこの最後のしぐさはどう考えてもシノックとは言えなかった。

突然マーシャは片頬に熱い息吹を感じ、驚いて顔をそむけた——と、後方に、馬車の車体につかまって、あの赤毛の見知らぬ男がぶら下がっていたのである、陽気に

齒をむき出して。ほおはりんごのように赤く燃えていた。マーシャは悲鳴をあげようとしたが、男は彼女の大きくあいた口に自分の唇をおしつけ、それから、車体から離れて霧のなかに姿を消した。

マーシャはあばずれではなかった……それでもやはりシクだとはいえない関係の男のところに立ち寄った。男はまだ玄関口だというのに、彼女の方に身を投げてきた。ひじょうな長身で、^{甲斐絹}の、制服のボタンのついた背広を着て、沈んだ顔をし、大きな口ひげをたくわえていた。冷たい手のひらで彼女の手を取ると、彼はくどくどと言いだした。逢う瀬を待つまの楽しさといったって、長く待つだけでは幸福とはいえない、などと。マーシャは帽子を脱がなかった。ベージュ色の食堂にはいると彼女は、ボンボンや、フルーツや、ぶどう酒の載っているテーブルの上に身をかがめた。キッドの手袋をはめた指でチョコレートチョコレートの箱を探りながら、彼女は、街頭で襲撃されてすっかり驚いてしまったので、今日はゆっくりできないの、と言った。彼女は口のなかにぶどうをほりこむと浮き浮きして官吏の顔をながめた。男はあごのあたりで両手を組みあわせ、足は下へ折りこんでい

た。彼は樽のなかから出すようなりつろな低音で彼女に懇願しはじめたが、その際、彼ののどぼとけは、カラーの切り口のなかでもぞもぞ動くのだった。

それから彼はドアをあけて、あまり誘惑的とは言えない寢室を指した。しまいにはとうとう、音を立てて寄木細工にひざまずいた。そのときマーシャはいっそう大声で、ばかにしたように笑いだした。もしあの陽気な、いかにも健康そうな見知らぬ男が、彼の目の前で自分にキスしたならば、このお役人はどんなに絶望することだろう、——と彼女は想像したのだ。そして彼女は、今日の奇妙な出会いのことがおかしくて笑っているの、と説明してやった。それを聞いてお役人が憤慨して言うには、その赤毛の見知らぬ男は、今日で三日もペテルブルクじゅうを騒がせているのだ、と。都心でも、場末でもその男に出っくわして、多数の貴婦人たちが警察に訴え出た、なんでも、ぜひそいつをつかまえる、という命令が出ているのに、その男は神出鬼没でつかまらないそうである。こんなことを語る必要はお役人にとってちっともなかったのだ。マーシャは今や涙が出るほど残念に思っていたのである、そのような危険な人物と近づきにな

る、めったにない、願ってもないチャンスを逸してしまったことを。彼女は腹を立て、マフのなかからボンボンの箱を投げすて、憎まれ口をたたいて、外へ出た。

自宅のある七階まで登りきると、マーシャはジャケットとスカートを脱ぎすて、フランクネルの部屋着をひっかけ、隅にある背の高い電気スタンドをつけ、赤いシェード越しに光に照らされて、むき出しの片手を枕にし、ソファアーに横になった。「注目すべき人間、しからずんばだれもだわ」と彼女は思った。そう思うことでいまいましい思いを片づけ、溜息をつくとき、デカダンスな詩集を開いた。

この時玄関でベルの音がして、だれやらがときれとぎれに笑うのが聞こえ、ボタンとドアがしまった。それからマーシャの母が部屋にはいつてきて、どつかと腰をすえると、薄笑いをしながら、こう言った。「新しい下宿人が帰ってきたとこなの、——それがお前、とんだおたんちんで、このばあさんに通せんぼをするんだよ」マーシャの母のモリーナ夫人は部屋を間借人に貸していた。客は主として独身者かひとり暮らしの者だった。彼女は、自分は《あくせくと苦勞》しながらも、娘を《人

形のように着飾らせて》いた。娘のほうはそれをいつくうにありがたいとも思わず、《自己流にやる》、といってもなんのことやらよくわからない、筋の通らぬ、《悪いやりかた》をしていた。「ほんとに悪い娘だわ」と彼女は、娘が前をはだけた部屋着の下からひざっ小僧をまる出しにして詩を読んでいるのをながめながら、思った。それから彼女は娘に、どこへ行ってきたの、どここのプレイ・ボーイのところですかートをすり切らしてきたんだい、ときいた。マーシャはそれに答えて、平然とページをめくると、どこからお母さんがそんな下品なことばを掘り出してきたのか知らないけれど、そんなことば使いをする、私の履歴に傷がつくだけよ、私だからいいもののほかの娘だったら、とつゝの昔に川にはまって死んでよ、と言った。そのかわりに今すぐ、さる有名な詩人を電話口へ呼び出し——彼女は今その人の詩を読んでいるのだが——、今晚じゅうにも自分をフィンランドの森のなかに連れてってくれるように頼んでやる、と意気まいた。母親は軽蔑したように笑いだした。一方、隣室の鍵穴から、青い、好奇心に燃えた目がマーシャの方をのぞいていた。引越してきたばかりの新しい下宿人が

ひじかけいすを近づけて、話をすっかり聞いていたのである。毒を含んだ笑いにがまんできなくなつて、マーシャはすばやく起き上がると、玄關の間にかけで行き、電話帳でその有名な詩人の番号を捜し出し、電話をかけた。

次のような会話が取りかわされた。「もしもし」とマーシャは言った。「ユーリイ・ブレードヌイさん（というのが詩人の名前だった）をお願いします。先生ですか？ あら、私の名前なんかどうでもいいですわ。私、先生のご本を読んでいますの。先生ってとても悲しいのね！ 先生のおことは、しばらく花弁のように落ちてきますわ。え？ 美しいですって？ メルシー。いいえ、私が自分でそう思ったんですの。え？ 私の顔？ なぜですか？ そう私は美人です。やせていて。目？ 目は大きくて、半ばつむつてゐるの。鼻？ 鼻筋が通つていて、鼻孔だつてちゃんとあるわ。え？ 私、今寝転んでゐる……絹のソファアの上で、クッションにうずまつて。じゅうたんが厚いので足音が聞こえないのよ。どこもかしこもピロイドのカーテンが垂れ下がつて。足もとには白い月下香があつて、うっとりするほど匂つてゐる

わ。唇には謎の微笑……え、え、私ひとりよ……なぜ？ いいえ、私はまる裸、部屋のなかはず暗くて、私はないも着てないの、胸の上に真珠が一つあるだけ……ええ、胸はやわらかくて、小さいわ。ただ赤っ毛のおきけを垂らしてゐるの……いらしてください、お待ちしますわ……なんなら、フィンランドへ行きましようよ」

だが母親はそれ以上聞いていることができなかった。ドアをいっばい明け放すと、彼女は玄關の間に向かつて「すべ公」ととなつた。娘はアドレスをささやくが早いか、受話器を置いて、部屋着をたくしあげ、母親のそばをすべりぬけて、自分の部屋にとじこもつた。

興奮して室内をひとしきり歩きまわつた末、マーシャは両足を投げ出してソファアの上に横になり、いっそうびたりと部屋着の前をかき合せてくるまつたものの、おじけづいてきた。母ははじめドアをたたいたが、それから台所へ行つた。そこから、台所女にこぼしながら、すすり泣いてゐるのが聞こえてきた。「むろん、来やしないだから、びくびくすることはないわ。でも、とつぜんやつて来たら」とマーシャは考えた。そして、耳をすましてゐると、片脇のドアの向こうで小声で歌つてゐる

のが聞こえる。それを聞いて彼女は胸がどきどきしてき
た。

茂った森は、あたたかく、小暗い、

その中を小川が流れている。

まどろむもよし、遠く遙かな

歌をうたうもよし。

草に臥せ、泉を見よ、

調べ高く芦笛を吹け。

歌え、「淋しいから来て」、と。

妖精が白い手で

お前の上にふりかけてくれるよ、

泉の水を……

マーンシャは聞いているうちにだんだん胸がさわがしく
震えてき、まるで蜜がしたたるように、甘くきゅーとし
めつけられる思いだった。壁の向こうで声がしなくな
り、母親が寝に行った。一方、彼女はなおも、蜜蜂が飛
びまわり、泉の上の木々がさわめき、足の下でしめった
草がくしゃくしゃになるのを思い浮かべていた。とつせ

んどアがあいて、部屋にひとりの男がはいってきた。彼
はシルクハントをかぶり、亜麻色のあごひげを生やし、
荒々しく、ボタンを残らずきちっとかけていて、顔じゅ
うに影がさしていた。「お呼びでしたから来ましたよ」
と彼は言った。「私は詩人です」マーンシャは恥ずかしさ
に顔をあげられなかった。「私、あなたの詩を読んでき
ました、さっき電話であなたに申し上げたことが、み
んなほんとうのような気がしたんです」と彼女は言っ
た。

彼は銀のステッキをぐるぐるまわし、ボタン穴のナデ
シコにさわってみた。「いいですとも、フィンランドへ
行きましょう」彼は嘲笑うように言った。マーンシャは夢
のなかのように言いなりになって、開いている洋服だん
すの戸のかげに行き、急いでスカートや、帽子や、シャ
ケントを身につけると、白粉のはいたハンドバッグを
持ち、うなずいて言った。「いいわ、行きましょう。た
だ玄関の間を通るときはそっと気をつけてね」

ふたりは用心深く外へ出て、七階から駆けおり、とて
も大きな自動車に乗った。車はふたりを終列車に送りど
けた。ふたりはクペーにとび乗った。汽車は動きだし

た。マーシャはこのとき初めて、恐怖と疑惑につつまれて同行者の顔をしげしげとながめた。

彼女の前に、シルクハットを脱いで、例の赤毛の見知らぬ男がすわっており、白い歯を見せて薄笑いを浮かべていた。マーシャは悲鳴をあげたが、額越しに見ながらそのまま窓ぎわにすわっていた。見知らぬ男は一本の指で彼女のひざにさわり、足踏みをし、大声で笑いだした。汽車は霧につつまれて森のなかを通り、ぶきみな汽笛を鳴らした。窓のそばを明りが疾走し去った。マーシャは恐怖とふしぎな興奮のために黙りこんでいた。彼女はなおも、自分の前にいるのは詩人だと思っていた。見知らぬ男は笑い声のあいまに、ペテルブルグで過ごした日々のお話をした。霧の出る日には、よく自分の別荘からペテルブルグへやってくるのさ、と彼は言った。霧につつまれた都で彼は冒険を捜し求め、いつもひとりではなく帰る、というのである。

国境をすぎて、汽車はクロミヤキに近づいた。見知らぬ男はマーシャの腕を取って車の外へ連れ出した。空には明るく冷たい星がいっぱいにちりばめられている。天の川が銀のように光っていた。森は薄黒い壁のように

立ちはだかつて、地面は落葉のかおりがただよっていた。見知らぬ男はマーシャをフィンランド人の馬車に乗せた。馬車は林間を走りだした。フィンランド人は時おり口笛を吹いた。見知らぬ男はひげ面をマーシャのほおにつけた。針葉樹林に乗り入れると、手の見分けもつかなかった。フィンランド人は「どう」と言って、馬をとめ、乗客がおりと、のろのろと引き返しはじめた、暗がりのなかをさらさら砂の音をさせながら。見知らぬ男は折れて小道にはいった……

やがて足の下に弾力性のある泥炭を感じはじめた。見知らぬ男はマーシャを抱きあげた。彼女は目をとじた。そして男の体温を感じつつ、身をよせて、両手でくびを抱いた。彼が「さあ、着いたぞ」といったとき、彼女が見ると、沼沢地のなかの小さな島の上に、星に照らされて小さな家が一軒あった。昇降口に人影のようなものがすわっていた。近づいてみると、それはまる裸で、からだじゅうが濃い毛におおわれていて、山羊の脚をしていた。「こわくないよ、危害は加えないから——と見知らぬ男はいつて、すわっているものの肩をつついた。異形のものは一声いなくて、茂みのなかへ駆けこんだ。

「家へ帰りたい」とマーシャは、目をとじて言った。だが見知らぬ男は、肩を押して彼女を家のなかに連れこみ、きびしく言った。「うす目をあけることはない、よく見るんだ」マーシャが見ると、それは小さな青い部屋で、天井や壁のあちらにもこちらにも金の皿がたくさんかかっていた……ろうそくが二本、小窓の上にもっていたが、それはまがいものだった——つまり、ガラスのかわりに鏡がはまっていたのである。床はつるつるしたエナメル仕上げで、花や蝶が描かれていて、隅にじゅうたんが投げ出してあった。そのじゅうたンをマーシャは、乾いた色とりどりの落葉だと思った。「ねえ、マーシャ」と見知らぬ男は言った。「なにもこわがることはないんだよ。おれは詩人のユーリイ・ブレードヌイなんかじゃなくて、牧神の王なんだ。信じられないというなら、見るがいい」彼は勢いよく衣服をかなぐり捨てると、はじめて自分の姿を見せた。全身が赤いちぢれっ毛におおわれていて、ピカピカ光る蹄をしており、金の角が生えている。「おれはお前がすこぶる気に入った」と彼は続けた。「おれの妻にしてやるよ。二時すぎに月がのぼったら、湖のほとりへ駆けて行こう。お前もみんなと

同じように、牧神なんてもうこの世にいないと思っていたらう。だがおれたちは人間ともより利口で、お前たちのあいだで暮らしながら、だましたり、かどわかしたりしているのさ。おれたちの言う通りにしない者は命がないのだ。着物を脱いで、髪をきれいにとかし、ひとりでここにいろんだ、おれはすぐ戻ってくる……お前が何を考えようと、何をたくらもうと——何もかもわかってしまうんだよ、あの金の皿にうつってな……だがいいか、窓のそばへ行つて、鏡をのぞくんじゃないぞ……」指でおどかして、彼は出て行つた……マーシャは絶望して両手を打ち合わせた……彼女は、壁の外の暗がりのなかで、見知らぬものどもが茂みのなかを駆け回り、鼻嵐を吹くかと思うと、突然、蹄で昇降口の上をたいたたりする音を耳にした……「私、もうだめだわ」とマーシャは思った。「あんたの皿なんかいらぬ、何も空想なんかしたくない、私はこわい……だからぜひともあの鏡のなかをのぞいてやるんだわ……」爪先立ちで彼女は二本のろうそくの光のなかに足を踏み入れ、のぞきこんだ……鏡のなかには自分の姿が、自分の部屋が、みすばらしい安物の電気スタンドが、クッションの上にひらかれたま

まの本がうつっていた。またドアが……ところが不意にドアが大きくあいて……さっきの見知らぬ男が、洗面をつくり怒りに燃えてそのなかにはいつてき、やにわに手のひらでマーノヤの目をふさいだ……彼女はあらがわずに、頭をのけぞらせ、あっと言って、固く口をとじた……それから、「かわいそうだから今度だけは、家に帰らしてやる。お帰り」という声を聞いた。それから先のことをマーノヤは、なに一つ思い出すことができなかった。彼女が目をあけたとき、部屋のなかは明るかった。下の街路から、荷馬車のガラガラ通る音が聞こえた。玄関口では母親のモリーナ夫人が新しい下宿人のことをのしっていた。その男はなんの挨拶もなしに、早朝トラック一つを持って姿を消してしまったのである。

マーノヤはどうしてもわからなかった、——自分は夢を見たのだろうか、もし夢だとすれば、夢はどこから始まったんだろう？ なによりも彼女が驚いたのは、ふつう夢のなかではありえないことが夢のなかで自分の身に起こったことである……そしてそのことが起こったということ——を彼女は確信して、驚き、首をふるのであった。また霧の日がやってきたとき、マーシャは鍵をかけた

とどじこもり、さらさらいう音に耳を傾け、期待し、二十日嵐のようにびくびくしていた。(佐々木彰訳)

Алексей Толстой Фавн. Собрание
сочинений т. 2. Москва, 1958

アレクセイ・トルストイ（一八八三—一九四五）小説家・劇作家。象徴派の作家として登場し、革命後写実主義に移行した。代表作に長編小説三部作『苦悩のなかを行く』、歴史小説『ピョートル一世』などがある。